

# 小学校英語教育におけるチャンクを利用した 音声指導, および読み書き指導への橋渡し

下 薫\*・猪井 新一\*\*

(2019年10月23日受理)

Introducing 'Chunking' into Listening and Speaking Activities and Using it as a Bridge for  
Teaching Reading and Writing in Elementary School English Education

Kaoru SHIMO and Shin'ichi INOI

キーワード: 小学校英語, 音声指導, 語彙指導, チャンク, 音から文字への連動

本論文は, 新小学校学習指導要領の外国語活動及び外国語科における総括目標, 5 領域の目標及び言語材料, チャンクを利用した音声指導と読み書き指導の具体的指導方法, 学級担任が音声指導をするための留意点等について考察したものである。チャンク指導は, 英語の音声指導および, 音声指導を読み書き指導に接続する上で有効と思われるが, 学級担任は小学校英語教育の理念や目的を見失うことのないように, 英語指導にあたることが大切である。

## はじめに

2020 年度より小学校では 3,4 年生から年間 35 時間の外国語活動, 5,6 年生は年間 70 時間の外国語科が開始する。その移行期間として 2018 年度より 3,4 年生で年間 15 時間, 5,6 年生で年間 50 時間の外国語の授業が実施されている。2020 年度から, 5,6 年生の外国語は教科となるため検定教科書が作られたが, 移行期間の教材に関しては文部科学省から 3,4 年生向けに *Let's Try!*, 5,6 年生向けに *We Can!* が制作され, 現在多くの小学校で, それ以前に配布された *Hi, friends!* と合わせて使用されている。*We Can!* には補助教材としてテキストに沿ったデジタル教材が用意され, 指導する小学教員のサポートになっている。この結果, 児童の外国語活動に対する学習意欲の高まりや, 中学生の外国語教育に対する積極性の向上などが報告されている。しかし一方で, 小学校の音声中心の学習と中学校の文字学習が円滑に連携していない点や, 日本語と英語の音声の違い, 英語の発音と綴りの関係, 文構造の学習などにおいて課題が指摘されている (文部科学省, 2018a, p. 7)。本稿では, 1) 音から文字へ円滑な連携を実現させる「チャンク」を利用した音声指導について, 学習指導要領

\*茨城大学教育学部非常勤講師

\*\*茨城大学教育学部

に記載された目標に沿って考察する。次に 2) 音声面を中心に学習指導要領に記載された 5 領域の目標について考察する。3) チャンクを利用した音声指導と読み書き指導について具体的な活動案を示しながら提案する。4) チャンクを含めた音声指導をする際の小学校学級担任の留意事項について言及する。

## 学習指導要領

### 1. 総括目標

文部科学省が掲げる小学校と中学校の外国語に関する目標を比較すると以下の通りである。

#### 小学校中学年の外国語活動の目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。  
(文部科学省, 2018a, p.11, 下線部筆者)

#### 小学校高学年の外国語科の目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。  
(文部科学省, 2018a, p. 67, 下線部筆者)

#### 中学校の外国語科の目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝えあったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。  
(文部科学省, 2018b, p.10, 下線部筆者)

文部科学省は小学校から中学校の教育が円滑に接続されることを重視し、中学校の外国語科の目標が「コミュニケーションを図る資質・能力」であることに対して、小学校中学年が「素地となる資質・能力」、高学年が「基礎となる資質・能力」とし、小学校の英語活動が中学校の礎になることを強調している(文部科学省, 2018a, pp.12-13)。この資質・能力には「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つが挙げられ、小・中・高等学校で一貫して育成するものであるとしている(文部科学省, 2018b, pp.7-8)。この3つの資質・能力の下で、小学校中学年の「聞くこと」「話すこと[やりとり]」「話すこと[発表]」の3領域に、高学年で「読むこと」「書くこと」に加え、教科として外国語を導入されることとなった。次に小学校の外国語活動と外国語科のそれぞれの目標を記載されている言語材料と共に音声の観点から考察する。

### 2. 小学校学習指導要領の目標に関する音声指導

#### 1) 外国語活動

学習指導要領に記載されている外国語活動の目標の中で音声面に触れている部分は以下の通りで

ある。

- (1) 外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。

(文部科学省, 2018a, p.13, 下線部筆者)

「日本語と外国語との音声の違い等に気付く」という表記は学習指導要領改定版で「知識及び技能」に追加された。これは、小学校で学んだ音声、中学校で円滑に文字に連動していないことなどの課題を踏まえての改定されたものである。小、中、高校と一貫した英語活動の実現のための重要な音声面の素地作りとなる。音声面の「素地」とは英語特有の音に気付き、その感覚を身につけることである。学習指導要領にもまず日本語と英語の音声の違いに気付かせることが重要だとし、英語の音に触れることで、英語のみならず日本語の音声の特徴に気付くことができると述べている。

小学校3,4年生で身につけた音声の「知識及び技能」は高学年以降の「聞く」「話す」力につながる「素地」として重要になる。その具体的な活動として学習指導要領では以下の具体的な内容を挙げている。

イ 日本と外国の言語や文化について理解すること。

- (7) 英語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。

(文部科学省, 2018a, p. 26, 下線部筆者)

未知なるものに興味を持ち、受け入れる柔軟性のある小学校低、中学年は、新たに耳にする英語の音声をチャンツやゲームを通して楽しみながら、繰り返し音聞き、発話する傾向がある。学習指導要領にも英語音声やリズムに慣れ親しむ具体例として、日本語と英語の音節の違い、英語特有の発音、そして動物の鳴き声の違いなど言葉の面白さ気付く、の3点を挙げている(同書, p.26)。音節に関しては、日本語ではミルクが(mi-ru-ku)と3音節であるのに対して、英語ではmilkと1音節になることを挙げているが、音声の素地作りの上で、この音節を意識したリズム、イントネーションの指導は特に重要だと言えよう。

## 2) 外国語科

小学校5,6年生を対象とした外国語科の音声面の目標に関しては、小学校学習指導要領に以下のように記載されている。

- (1) 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を見につけるようにする。(文部科学省, 2018a, p. 67, 下線部筆者)

教科としての外国語科では、中学年の外国語活動において英語の音声や基本的な表現に慣れ親しんだことを生かし、中学校で身につける実際のコミュニケーションで活用できる技能の基礎的なもの

を身につけるとされている。具体的には小学校から中学校への音声から文字への学習が円滑に進んでいないこと、音声の違い、発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある点などを踏まえて、高学年から発達段階に応じて「読む」「書く」を加え、言語能力向上の観点から言語の仕組みを理解することが求められる(同書, p. 68)。音から文字への円滑は連携とは、身についた英語のリズム、イントネーションなどの音の感覚を保ったまま文字、単語、文章の「読み」につなげていくことである。つまり音を伴った「読み」「書き」学習を実現させることが重要である。そこで次に、学習指導要領に設定されている各領域の目標を、児童が音声受容する言語材料と合わせて考察する。

### 3. 5 領域の目標と言語材料

#### 1) 外国語活動における「聞くこと」「話すこと」の目標及び言語材料

中学年の外国語活動においては、高学年以降で設定されている5つの領域のうち、「聞くこと」、「話すこと[やりとり]」、「話すこと[発表]」の3つの領域について目標を設定している(文部科学省, 2018a, pp. 19-24)。ここでは*Let's Try!* と *We Can!* に掲載されている言語材料と合わせて指導要領に記載されている目標を領域別に見ていく。

##### (1) 「聞くこと」

中学年で「聞くこと」の目標は、児童が興味・関心を示すような身近で簡単な事柄、例えば自分のことや身の回りの物についての簡単な語句、基本的な表現がゆっくりはっきりと話された際に聞き取れ、意味が分かるようにすること(同書, p.19)。身近な題材を選ぶことで、初めて聞く英語の単語の音声と意味が一致し、受容語彙として児童は受け入れることになる。言語材料として、'Jump, Walk, Run' などジェスチャーと共に示すことで理解につながる動詞や、'I like blue. I have a pen. I go to school.' など自分に関することの聞き取りなどが挙げられる。基本的な表現の理解を助けるための、イラスト、写真などの視覚教材を使うことの重要性にも触れている(同書, p. 20)。

##### (2) 「話すこと[やり取り]」

相手とのやりとり、すなわち対話形式の「話すこと」に関して、まず第一段階として、'How are you? I'm good.' などと挨拶を交わしたり、簡単な依頼に応じて感謝の気持ちを述べ合ったりする(同書, p. 32)、とある。児童同士のやり取りの例として、'The A card, please. Here you are. Thank you. You're welcome.' が挙げられている通り、日常的な場面設定で言語活動が行われることで児童は英語による表現を自然に理解し、発話につなげることができる。第二段階としては、ペアやグループで自分のことや気持ちを簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うとある。ここでは第一段階の定型的なやり取りから発展して、話し手と聞き手が互いを意識して、分かりやすく伝えたり、聞き手はうなずくなどの反応を返して会話を進めることを目標としている。'That's great! Me, too. That's too bad.' など自分の気持ちを伝えることで、自己尊重や他者理解にもつながるコミュニケーションの機会と考えられる。そして第三段階では教員らのサポートを受けて、自分や相手のこと及び身の回りのものに関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて質問したり、質問に答えたりする、とある。第二段階で友人や先生など他者への興味を示し、話しを聞いた次のステップとして、「相手意識」「目的意識」を持って英語で簡単に質問をし、答える活動はコミュニケーションを図る上で大切である。既習の言語材料を使い、場面設定を明確にして、'Do you like soccer?'

Yes, I do. What color do you like? I like blue.’ など児童同士が積極的にやり取りする機会を作ることが必要である(同書, pp. 21-22)。

### (3) 「話すこと[発表]」

人前で学習してきた簡単な語句や基本的な表現を用いて発表することで児童は自信を深め、学習動機を高めることになる。「聞くこと」「話すこと[やり取り]」で繰り返し聞いて、発話してきた語句や表現を整理し、まとめて話すことは重要である。話すテーマに合わせて実物やイラスト、写真などを見せながら話す例として学習指導要領には、校内の自分のお気に入りの場所について、イラストや写真を見せながら、‘My favorite place is the music room. I like music.’ などと自分の考えや気持ちを話す活動を挙げている(同書, pp. 23-24)。そして「話すこと[やり取り]」同様に、聞き手はうなずくなどの反応をして、相手の考えや気持ちを受容する態度の育成にも留意する必要があると書かれている。発表は毎月テーマを持って学習してきたことのまとめをする良い機会である。‘All About Me’ と題して ‘My name is Ken. I like blue. I have a dog. My favorite food is sushi.’ など、毎月1枚イラストや単語をカードに書き、それを束ねて学期末につなげて発表すると、児童はある程度まとまりのある英語を発話することに自信を持つことになる。

## 2) 外国語科における「聞くこと」「話すこと」の目標及び言語材料

教科に位置付けられた小学校5, 6年生の外国語科の領域別の目標は、外国語活動の「聞くこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」に、「読むこと」と「書くこと」が加わった。中学年で英語に慣れ親しみ、英語学習への動機付けを高めた上で、高学年からは発達段階に応じて文字を、「読むこと」と「書くこと」を通して導入し、総合的に扱う教科学習を行うとした(文部科学省, 2018a, p.75)。中学年で暗的に取り入れられた音の感覚を使って、新たに活字体で書かれた文字や単語を認識しながら、語順や文の構造などに気付かせ、言葉の仕組みの理解を促すことになる。

### (1) 「聞くこと」

高学年における「聞くこと」の目標は、中学年の「簡単な語句や基本的な表現」の聞き取りに加えて、短い話の概要を捉えることができるようにする、とある(文部科学省, 2018a, pp.76-77)。中学年で歌やチャンツで英語の特有の音やイントネーションに慣れてきた児童が、高学年である程度のまとまりのある短い話や説明を聞いて理解する機会は大変重要である。一語一語の単語を聞いて理解することにとらわれず、ある程度の長さの話を通りながら聞く練習が必要になる。その中で、知っている単語の聞き取り、文脈から内容を把握する力をつけることになる。その際イラストや写真など理解を助ける視覚教材を使用することが表記されている。We Can! では Let's Watch and Think が10文程度のまとまりのある英文をデジタル教材で視聴し、その内容に合う絵を選んだり、クラスで内容確認するなどの活動につなげている。視聴前に聞き取りのポイントを確認して言語材料への予測や気付きを促したり、自分と比較することで目的を持って聞かせることができる(文部科学省, 2018c, p.76)。

### (2) 「話すこと[やり取り]」

高学年の「話すこと[やり取り]」は中学年の蓄積を土台に、自分で考えて質問をしたり、自分の力

で考えを伝えることを目標にしている。具体的には ‘How about drinks?’ ‘No, thank you.’ など指示や依頼に応じる活動では、断ったりすることができるようにとある。また日常生活に関する事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現で伝える例としては、‘You like sushi. Me, too. Sushi is delicious. I like salmon. Do you like it?’ と 2, 3 語の単語を使った短文をつなげて考えを話す。(文部科学省, 2018a, pp.106-107)。さらに中学年で教員や友達のサポートを受けて行っていた質問をしたり答えたり活動を、高学年では相手とのやりとりの際、それまでの学習や経験を元に、自分の力で質問し、答えることとしている (同書, pp.79-80)。

### (3) 「話すこと[発表]」

発表に関しては、中学年の外国語活動の経験を踏まえて、伝える事項が複数ある時は、整理して順番を決めたり、選んだりして聞き手に分かりやすく伝わる工夫ができることを目標にしている。またその内容に関しては学校生活や地域に関することなどに発展させ、自分の考えを伝えることを求めている。例えば、中学校生活への期待に関して発表する例として以下を挙げている。

‘Hello, everyone. I want to join the badminton club. I like badminton very much. I want to make many friends. Thank you.’ (同書, p.110)。

## 3) 外国語科における「読むこと」「書くこと」の目標及び言語材料

### (1) 「読むこと」

文字に関しては活字体を認識し、その読み方を発音することができるようにすることと、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的表現の意味が分かるようにするとある。中学年で「聞くこと」「話すこと」の活動を通して音声で慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を識別し、その意味が分かるようにする。単語の発音と綴りの関係は中学校で指導することとし、小学校では文字が示す音の読み方に留めることを記している。しかし一部の代表的な音に関しては歌やチャンツを使って、文字に名称と音があることに気付かせて言語活動につなげることは重要であるとしている (同書, p.78)。We Can! に収録されている4種類の Jingle は A から Z で始まる 26 個の単語が並び、アルファベットの名前、音、単語の順にリズムよく発音していく活動である。上記の「一部の代表的な音」とはアルファベットの 5 つの短母音と 21 の子音を指していると思われる。

### (2) 「書くこと」

大文字と小文字を正しく書き分け、語順、語と語の区切りを識別し、簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにするとある (同書, p.81)。語順を意識する具体例としては ‘Sakura pushed Taku.’ を ‘Taku pushed Sakura.’ と語の順番を替えると意味が変わることを知り、英語においては語順が重要な役割を担っていることを認識させる。この際日本語と比較して 2 つの言語の文の構造の違いに気付かせることができるとしている (同書, p.82)。

以上、学習指導要領に記載された音声面を中心とした目標及び言語材料についてまとめたが、次にその目標を達成するためにチャンクを利用した音声指導から文字指導への具体的な提案を行いたい。

## チャンクを利用した音声指導から読み書き指導への接続

学習指導要領にある通り、小学校の外国語活動と外国語科で礎を作り、中学校でコミュニケーションを図る資質・能力を育成するために、小学校で培われた音声が中学校での文字学習に連結することが必須である。そのため文字学習が開始しても、音声と文字を分割することなく、音と共に学習は継続されることが望まれる。心も体も柔軟な児童は、初めて聞いた英語の音やリズムをそのまま再生することが大人に比べ容易にできる。この時期に歌やチャンツで繰り返し音に触れ、数多く発話することで、児童はやがて英語特有のリズム、イントネーションを伴った英語の音声、すなわち音の感覚（「音感」—おとかん）を身に付けることができる（下, 2018b, pp.1-2）。それはつまり暗示的に文字、語彙、文構造の知識を習得していくことであり、自動化された暗示的知識は、意識しなくても自然に出てくることになる。しかし文字学習の「読み」「書き」「文構造」を、音声を伴わず明示的指導で導入すると、せっかく身についた「音感」はリズムを崩し自然なスピードを失う。日本語を母語とする児童の母語習得を考えると、幼児期に耳や体の感覚で吸収した日本語の「音感」を使いながら小学校で日本語の文字、語彙、文構造を学習している。「音感」は文字学習を定着させるツールとして必要になる。しかし母語と比べて外国語は児童がその言語を受容し産出する機会は圧倒的に少ない。外国語教育の中で児童が「音感」をつけるために単語と文の間の長さであるチャンクを使った指導法を提案したい。

### 1. チャンクとは

チャンクとは2,3単語の固まりのことであり、第二言語習得の研究においてはNattingerが早い段階から‘chunking’(チャンキング)という言葉を使い、初級の学習者は基本となるチャンクを使って学習を開始することが重要だと述べた(Nattinger & DeCarrico, 1992, p.159)。音声でインプットされた言葉は、個々の単語単位だけでなく、句やさらに長い語の固まりの単位で記憶される。Lewisは言語学習に適した理想的なチャンクの数に2語から7語でこれが記憶の定着につながる数だとしている(Lewis, 2002, p.33)。

Foster(1990, p. 142)は乳児期の前言語期から、幼児の初語、一語文、二語文など言語獲得期まで、乳幼児の発話の特徴を観察しまとめている。その中でまだ文字が読めない子供は、自然な発話をひとつつながりの流れとして捉えるため、例えば、‘Whatsat’というチャンクを1つの単語として認識すると述べている。子供は発話を理解する際、‘what’ ‘-s’ ‘that’と単語1つ1つをボトムアップで組み立てているのではなく、チャンクで入ってきた固まり全体の音から、後に部分である単語に気づき、理解すると述べている。

チャンクは外国語教授法においても取り上げられており、Lewis(1993, pp.122-123)は、学習者は頭の中に最初から組み立てたチャンクを持っていて、それぞれの場面で必要に合わせて引き出して使っているとしている。学習者にチャンク学習を導入し、チャンクの意識付けができる言語材料や活動を行うことが言語教育の中心であるべきだとまとめている。またlexical items(語彙項目)の分類として単語、句動詞、コロケーション、慣用表現などをあげている。そしてある程度の長さの発話を、意味をとらえながら聞くと、内容語に強勢があるtone units(音の単位)が作り出すチャンクが聞こえてくると述べている。このtone unitsは黙読する際も読みを得意とする学習者は‘silent chunking’として使っている(Lewis, 2002, pp. 58-59)。内容語に強勢をつけた2, 3語で構成されたチャンクを

繰り返し聞き，繰り返し発音することで，インプットされた tone units はやがて理解を伴った intake につながると考えられる。チャンクの作り方として，Lewis はコロケーションのリスト(collocation boxes) にまとめ，形容詞+名詞，動詞+名詞，名詞+動詞，動詞+形容詞+名詞 の4グループに分けたものを紹介している。そしてそれぞれの箱には5単語以上は入れるべきでないと述べている (Lewis, 1993, pp.124-126)。

表 1. Collocation boxes (Example 1-4) (Lewis, 1993, p, 126)

(re)draft	confidential	letter
dictate	sales	
go through	special offer	
get	urgent	
fax	promotional	

small	Italian	restaurant
nice	Chinese	
classy	Thai	
reasonable	Indian	
popular	Mexican	

a sheet of (large, flat, piece)	paper
	glass
	ice
	flame
	stamps

a letter	of	complaint
		resignation
		acceptance
		.....
		.....

また文レベルのチャンクの考え方としては，That's で始まる collocation boxes を例にあげている (表 2 参照)。

表 2. Collocation boxes (Example 5) (Lewis, 2002, p.39)

That's	great.
	dreadful.
	exciting.
That sounds That must be That must have been	terrifying.
	interesting.
	marvelous.
	awful.
	wonderful.
food fun.	

この区分けに関して Lewis は文法的な分析ではないとし，文構造より語彙に主眼におっていると述べている。さらに自然な発話は常に完成したものではなく，文として未完成の状態があるとしている。



る(Lewis, 2002, p.39)。以上のチャンクの考え方をもとに、日本の児童の言語習得にどう活かせるか考えてみたい。

## 2. チャンクを利用した外国語活動と外国語科における「聞くこと」「話すこと」の活動案

文科省は外国語科の「知識及び技能」のうち「音声」に関する具体的に取り扱う内容を以下の通りとしている。

- ・ 語と語の連結による音の変化
- ・ 語や句、文における基本的な強勢
- ・ 文における基本的なイントネーション
- ・ 文における基本的な区切り

さらに、「語、連語及び慣用表現」に関しては、

- ・ 連語のうち、get up, look at などの活用頻度の高い基本的もの
  - ・ 慣用表現のうち、excuse me, I see, I'm sorry, thank you, you're welcome などの活用頻度の高い基本的なものをあげている。
- (文部科学省, 2018a, p.156)

これらの「音声」「語彙」に関する内容は現在行われている活動でどれだけ達成できているのだろうか。現場の教員も「行なっている活動が目標を達成できているか自信がない」などの声を聞く。例えば単語学習はどうであろう。「動物」「食べ物」「教科」などの名詞をフラッシュカードで覚えたり、体を動かしてジェスチャーなどで動詞を覚えたりと、単語を1語単位で学習していることが多い。単語学習は単調で児童も飽きてしまいなかなか次に発展できないという声も教員から聞く。実際の練習だけでは発話量も増えず、文レベルでの会話にたどりつくことは困難である。現在使われている小学校の教材も、単語学習からいきなり目標言語の英文や短いダイアログに飛んでいると感じる。そこで単語と文の中間にあたるチャンクを導入することで、1) 語の連結による音声変化と強勢、イントネーション、区切りなどの音声知識、2) 品詞の組み合わせ、語順という文構造の知識を暗示的に学習できるのではないかと考える。チャンクで受容された「音感」はチャンクで産出されるため、「聞く」「話す」のみならず「読む」「書く」の学習がスムーズにつながると考えられる。チャンク指導の第一歩は教員がまずチャンクを知り、意識することである。チャンクを使う指導上の利点は以下の項目が考えられる。

- 1) 歌・チャンツの強勢や区切りがわかり、オリジナルの歌詞を作ることができる。
- 2) 会話活動をチャンクで区切りながら行くと、自然な会話に発展できる。
- 3) チャンクの「音感」を使えば、文法知識がなくても正しい語順で「書く」活動ができる。

チャンクを、リズムをつけた歌・チャンツで導入すると「音感」が残すことができる。歌・チャンツの活動は、常に児童が好きな活動の上位にあり、多くの小学校で、授業開始時のウォーミングアップの活動として使ったり、毎日昼休みに流すなど、様々に活用されている。歌・チャンツの音声面の効果については文部科学省研修ガイドブックにも以下の通り記載している(文部科学省, 2018c, p.105)。

- ・ 外国語独特のリズムやイントネーションを繰り返し聞くことで自然に身につけることができる
- ・ 歌を歌う、動作を加えるなど、体全体で英語の音声やリズムに触れるため、記憶に残りやすい

- ・ 簡単な歌は、繰り返しが多く、英語らしい発音を身につけやすい

歌・チャンツは単純な繰り返しの中で、単語を置き換えるなどして、表現を増やすことができる。しかし一方で、楽しいだけの活動で終わってしまい、音声、リズムがどれだけ児童の中に残っているか、学習の結果がわからないなどの教員の声を聞く。チャンクを意識して歌・チャンツの指導を行うと、児童に音やリズムの気付きが生まれ暗示的な知識がつき、それが「音感」につながる。歌・チャンツは以下の順番で行うと「音感」がつく。まず、すぐに歌わず、音を「聞く」ことが大切である。歌・チャンツでリズムをとるには拍手でなくタッピング（指で机を軽く叩く）が良い。リズムの感覚を体感でき、自分の歌う声が良く聞こえる。

- (1回目) 歌わず、リズムを聞く。タッピングで強弱のリズムを取る。
- (2回目) 歌わず、歌詞を聞く。タッピングしながら絵をヒントに内容を類推させる。
- (3回目) タッピングをしながら歌えるところ（強勢部分）を中心に歌う。歌詞と絵を提示する。  
(下, 2018b, 「歌・チャンツについて」)

次にチャンクを意識させる2つの歌・チャンツを紹介する。

(1) On the, In the, Under the

3拍強弱リズムの前置詞チャンクで構成されている。on the mat, under the chair など、日本人学習者にとって抜けやすい冠詞の「音感」をつける。歌詞の1, 3行目は文としては非文法的であるが、「前置詞+冠詞」でリズムを作り、前置詞の定着につながる歌・チャンツである。

<u>On the,</u>	<u>In the,</u>	<u>Under the</u>	(下, 2005, p.43)
•	•	•	
<u>On the,</u>	<u>in the,</u>	<u>under the</u>	
<u>Where</u>	<u>is</u>	<u>the cat?</u>	
<u>On the,</u>	<u>in the,</u>	<u>under the</u>	
The <u>cat</u> is	<u>on</u>	the <u>mat.</u>	(●と下線部が強勢のある音節)

(2) My Favorite Clothes

洋服と色をテーマにしたこの歌・チャンツでは、歌詞1行目の名詞に、3行目で形容詞を加え、同じリズムの中で、a cap から a red cap と単語を増やし、音や強勢箇所の変化など意識できる。さらに、形容詞の意味、語順に気付かせる歌・チャンツになっている。

<u>My Favorite Clothes</u>	(下, 2018a, 'Clothes')		
•	•	•	•
A <u>cap,</u>	a <u>shirt,</u>	<u>jeans</u>	and <u>shoes.</u>
<u>These</u> are	the <u>clothes</u>	I <u>want</u> to	<u>wear.</u>
A <u>red</u> cap,	a <u>gray</u> shirt,	<u>blue</u> jeans	and a <u>pair</u> of shoes.
<u>Don't</u> they	<u>look</u>	<u>good</u> on	<u>me?</u>

歌・チャンツのデジタル教材で、歌詞の字幕の文字を音源に合わせて1文字ずつ色を変えて流しているものがある。しかしここは文字ではなく音節で色を変えて示めす方が効果的であろう。歌・チャンツは「音から文字」を実現する貴重な教材である。音、リズムに慣れ、内容を理解したら、次の段階として歌詞を見せて「読む」最初の体験をさせる。単語の「読み」を導入していない小学校英語では、単語ではなく音やリズムを読ませる phonological awareness (音韻認識) の活動を今後は考える必要があるだろう。

### 3. チャンクを利用した外国語科における「読むこと」「書くこと」の活動案

学習指導要領に記載されている文及び文構造には、日本語と英語の語順の違い等に気付かせるとともに、基本的な表現として、意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを推奨している。具体的な内容として以下の a-c の3種類の文構造をあげている。

- a. [主語+動詞]
- b. [主語+動詞+補語]のうち、主語+be 動詞+(名詞, 代名詞, 形容詞)
- c. [主語+動詞+目的語]のうち、主語+動詞+(名詞, 代名詞)

*Let's Try!* と *We Can!* には肯定文と否定文の言語材料が合わせて 145 文収録されている。これを上記3種類の文構造に照らし合わせながら、collocation boxes を使ってチャンクに分けて考察した。チャンクの分類方法は Lewis(1993) が分類した通り、名詞、動詞、前置詞を中心とした数語の固まり及び、単語単体である。その一部を紹介すると以下の通りである。

上記 a. の「主語+動詞」は I study. の1文のみであった (表3 参照)。

表3 「主語+動詞」チャンク

Chunk 1	Chunk 2	Chunk 3	言語材料収録箇所
I	study.		We Can 1 (Unit 1)

上記 b. の「主語+be 動詞」は I'm, S/he is, This is, It's など始まる 47 文あった。「主語+be 動詞」を Chunk 1 として、後続の名詞、形容詞、名詞句、前置詞句を Chunk 2, Chunk 3 に分類した (表4 参照)。

表4 「主語+be 動詞」チャンク

Chunk 1	Chunk 2	Chunk 3	言語材料収録箇所
I'm	a nurse.		We Can 1 (Unit 3)
He is	good at	playing tennis.	We Can 2 (Unit 6)
This is	my favorite place.		Let's Try 2 (Unit 8)
It's	on the desk.		We Can 1 (Unit 7)

上記 c. の「主語+動詞」は 87 文あり、I like, I have, I can, I want, I want to などのよく使われる「主語+動詞」は Chunk 1, その他の動作動詞 (study, play, enjoy など) は Chunk 2 に分類した (表5 参照)。

表5 「主語+動詞+目的語」チャンク

Chunk 1	Chunk 2	Chunk 3	言語材料収録箇所
I like	music	very much.	Let's Try 2 (Unit 8)
I have	a new ball.		We Can 2 (Unit 3)
I don't have	a pen.		Let's Try 2 (Unit 5)
You can	see it	on your left.	We Can 1 (Unit 7)
She can't	sing well.		We Can 1 (Unit 5)
I want	a new ball.		We Can 1 (Unit 6)
I want to	read	many books.	We Can 2 (Unit 9)
I	always wash	the dishes.	We Can 1 (Unit 4)

小学3年から6年までに出てくる言語材料の文構造を横断的に一覧すると、繰り返し出てくる言語材料が多いことがわかる。音声主体で分けたチャンクを中学年で導入し「音感」をつけ、スパイラル状に繰り返しチャンクを意識して導入することで、「聞く」「話す」から「読む」「書く」の橋渡しになるであろう。

以下、文構造や語順を意識し「読み」「書き」につなげる活動例を紹介する。まずは音声でチャンクを導入し、次に、カードやノートに書き写す際も、必ず言いながら書くことが大切である。

(1) Q&A チャンク(名詞チャンク) 教材：白い犬のイラストのカード大1枚

「冠詞+形容詞+名詞」のチャンクの音と語順に慣れる。強勢(下線部)を意識してチャンクの音を聞き、声に出す練習をすると、短く入る冠詞の「音感」も習得できる。チャンク学習の Q&A は、チャンクを意識するためにも文レベルで答える必要はない。

- Q1: What's this?                      A1: A dog.  
 Q2: What color is the dog?        A2: A white dog.  
 Q3: Is the dog big or small?      A3: A small dog.  
 Q4: What shape is the dog?        A4: A round dog.  
 Q5: How does the dog look like?    A5: A cute dog.      (下線は強勢のある音節)

次のステップでは「冠詞+形容詞1+形容詞2+名詞」のチャンクを導入し、形容詞の順番を含む語順の「音感」をつける。教材に様々な犬のイラストのカード大を用意し、それを見ながら Q&A をする。(例) a long brown dog (数+形+色), two white dogs (数+色),  
 a funny big dog (数+状態+大きさ)

(2) どんな猫ですか?(名詞チャンク) 教材：様々な特徴や動作をする猫のイラスト

What's the cat like? (形容詞, 現在分詞, 前置詞との組み合わせでチャンクを作る)

「冠詞+形容詞+名詞」の3単語チャンク(下記, No.2-5)に慣れたら、チャンクを2つにして(下記, No.6-8)「どんな猫?」の答えをイメージする。その際、意味も「中国から来た」「箱の中」「長い尻尾」というチャンクでとらえさせ、決して、from, in, with など単語レベルに分解して内容理

解をさせない。最後は3チャンク(No.9)で強勢(下線部文)を聞き、イラストを見ながら理解し、発話し音と内容を一致させる。さらに、チャンクに分けて単語を見せることで、チャンクで「読む」体験をさせる。

1. a cat
2. a big cat
3. a black cat
4. a hungry cat
5. a jumping cat
6. a cat                    from China
7. a cat                    in the box
8. a cat                    with a long tail
9. a cat                    sleeping                    under the tree

(3) 動作をリズム良く言おう(動詞チャンク) 教材：イラストと英単語で作られた collocation boxes

TPR(トータルフィジカルリスポンス)の応用で児童向けの英語活動は、教員の指示を聞いて、児童が動作を行う‘Stand. Sit. Run.’など自動詞の学習が多い。しかし教室英語を含め、児童が英語で表現できる学校や家で行う動作は数多くある。まずリズムよく他動詞+名詞の組み合わせのチャンク(表6参照)の音声を入れ、次に、カード合わせやカードの並び替えなどの「読み」のゲームにつなげる。

表6. 動詞チャンクの例

catch	the ball
kick	
hit	

close	the door
	your books
	your eyes

play	soccer
	catch
	the piano

make	a circle
	two teams
	eye contact

(4) 考えながらゆっくり会話しよう(名詞チャンク, 動詞チャンク)教材：話すテーマの絵, 写真, リアリア, サイコロ, 会話ルーレット

Q&Aを最初から暗記してロールプレイで行うのではなく、考えながら質問する、考えながら答える状況を作る。Lewis(2002)が述べているように、自然な会話は未完成であることから、チャンク、語の区切りを意図的にQ&Aを導入することで、児童はゆっくり考えながら、チャンク単位で会話を行うことができるだろう。I like, I have, I wantなどの「主語+動詞」やI canの「主語+助動詞」もチャンクで「音感」をつけ、会話を完成させる活動。

Q: What animal do you like?

A: Well...I...

I like.... dogs.

I like ... little dogs.

Q: Oh, you like... little dogs?

A: Yeah, ... I like... little dogs and .....

I like ... white dogs.

Q: Oh, you like... white dogs?

So you like .... little white dogs.

A: That's right. I like .... little white dogs.

このチャンクで考えながら話す活動は *We Can!* 2 の Small Talk を使って発展できる。Small Talk では、相手の言葉をチャンクで繰り返したり、質問を疑問文にせず、クエッションマークをつけるなど自然な会話の流れが使われている。一度ロールプレイをしたら終わりと、Small Talk の応用に苦慮する教員の声も聞かすが、まずは基本の会話文に fillers や話し相手の名前を加えたり、チャンクの区切りでポーズをつけて考えながら会話する練習を行うのが望ましい。児童が間違いを気にせず自由に会話する機会を多く設けることが必要だ。

### チャンクを含めた音声指導をする際の小学校学級担任の留意事項

小学校教員、とりわけ、学級担任 (HRT) が英語のチャンクを含めた音声指導をする際の留意点を述べる前に、小学校教員の実態にふれる。小学校教員のうち、いわゆる中学校英語免許取得者は 1 割にも満たない (Mahoney & Inoi, 2015)。言い換えれば、大多数の小学校教員は、英語音声学のような専門的科目を学生時代は履修していないため、英語音声の専門的知識が不足している。例えば、英語は強勢を中心とした強勢拍リズムの特徴をもち、一方、日本語は音節 (あるいはモーラ) を中心とした音節拍リズムという特徴をもつという知識や、その知識を実際の英語運用に活用している小学校教員はごく少ないと思われる。さらに、海外滞在経験が長期間でなければ、自然な英語の音声にふれる機会もそれほど多くはないと思われる。このような実態があるにも関わらず、小学校学習指導要領において、HRT が英語授業の計画・実施することが求められている (文部科学省, 208b, p. 48; p. 128)。英語に対し苦手意識をもち、英語の発音に自信のない HRT は、英語の発音が得意なネイティブスピーカー、英語の教員免許状の所有者、海外滞在経験の長い外部人材等に、本稿で論じたチャンクの指導を含め、英語の授業をお任せすればよいのであろうか。どうすればよいかについて、留意点を以下に述べる。

#### 1. 小学校英語教育の目標をよく理解する。

上述したように小学校英語教育の目標は基本的には、外国語 (英語) を通して、コミュニケーションを図るための資質・能力を図ることである。改定前の学習指導要領では「積極的にコミュニケーションを図ろうとする素地」を培うことであった (文部科学省, 2008)。英語を聞くこと・話すことのスキル養成は第一義ではなかった。新学習指導要領においても、英語を聞くこと・読むこと・話すこと・書くことのスキル養成は大事であるが、それ以上に、コミュニケーションをしようとする態度を養うことはもっと大切であることを、HRT は認識する必要がある。

#### 2. HRT は英語のモデルではなく、英語を学ぼうとする学習者モデルである。

小学校英語授業における HRT が欠かせない存在であることは、新旧小学校学習指導要領に明示されている。新旧小学校学習指導要領において、ほぼ同じ表現を用いて、HRT は児童の不安を取り

除き、新しいものへ挑戦する気持ちや失敗を恐れない雰囲気を作り出すために、豊かな児童理解と高まり合う学集団作りが求められるとある(文部科学省, 2018a, p. 48; p. 128)。そのためには、まずはHRTが英語を学ぼうとする学習者としてのモデルを、子供たちに提示することである。英語のモデルはALT等の英語のネイティブスピーカーであり、海外滞在経験のある外部人材、あるいはCD音声教材である。HRT自身が、上手ではなくとも英語を話してみる。そのことで子供に勇気を与え、いわゆる英語を学ぼうとする学習者モデル(直山, 2008, p. 27)を子供たちに示すことが大切である。チャンクを指導するにしても、最初はチャンク指導ができる指導者にお願ひし、HRTは授業中とにかくまねてみることである。下手であってもHRTがチャンク学ぼうとしている姿は、子供たちに学習者モデルを提示することになり、安心感を与える。少しずつチャンク指導を、授業を通して学び、立ち立ちできるようになればよい。

### 3. 英語の発音は通じればよいとする認識をもつ。

英語の発音は通じればよいということを、HRTのみならず、英語教育関係者が認識することである。英文法に関しても同様である。日本の子供たちは将来英語の母語話者を相手にするよりも、非英語母語話者を相手にして英語によるコミュニケーションする機会の方が圧倒的に多いことが十分予想される。Jenkins (2009, p. 41) は、ELF (English as a lingua franca) という用語を用い、日本人英語学習者も含め、従来英語を外国語として学習してきた国々の人々は、学術的な場面も含めいろいろな場面で、第一言語が異なる様々な人々と、共通語としての英語、つまり ELF を用いてコミュニケーションする必要があると述べている。

従来の日本の英語教育は「正確さ」(Accuracy)に重点を置きすぎるあまり、積極的にコミュニケーションをしようとする態度を十分育むことができなかつた。英語の発音・文法の正確さについては、中学校英語科で、徐々に指導すればよい。チャンク指導で、どこまで個々の発音の正確さが求められるかは議論の余地はあるが、いわゆる、英語の強弱のリズムがある程度できれば良いとすべきであろう。チャンク活動は、あくまで意味が通じるための一つの手段であり、それ自体ができることが目的となつてはいけなひ。

## 注

1) 第一著者の下薫および第二著者の猪井新一の執筆分担箇所は以下の通りである。

下 薫: 「はじめに」「学習指導要領」「チャンクを利用した音声指導から読み書き指導への接続」

猪井 新一: 「チャンクを含めた音声指導をする際の小学校学級担任の留意事項」

## 引用文献

Foster, S. 1990. *The Communicative Competence of Young Children*. New York: Longman.

Jenkins, J. 2009. Exploring attitudes towards English as a lingua franca in the East Asian context. In Murata, K & Jenkins, J. (eds.), *Global Englishes in Asian Contexts: Current and Future Debates*, pp. 40-56. Houndmills: Palgrave Macmillan.

Lewis, M. 1993. *The Lexical Approach*. London: Language Teaching Publications.

- Lewis, M. 2002. *Implementing the Lexical Approach*. London.: Language Teaching Publications.
- Mahoney, S. & Inoi, S. 2015. Homeroom Teachers' Perspectives on Goal Achievement in Japan's Foreign Language Activity Classes. *JES (The Japan Association of English Teaching in Elementary School) Journal, Vol. 15, 52-67*.
- 文部科学省. 2008. 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』. 東洋館出版社.
- \_\_\_\_\_.2018a. 『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説外国語活動・外国語編』. 開隆堂出版.
- \_\_\_\_\_.2018b. 『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説外国語編』. 開隆堂出版..
- \_\_\_\_\_.2018c. 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/\\_icsFiles/afieldfile/2017/07/07/1387503\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2017/07/07/1387503_2.pdf) (2019 年 8 月 1 日閲覧)
- 直山木綿子. 2008. 『ゼロから創る小学校英語』. 文溪堂.
- Nattinger, J. & DeCarrico, J. 1992. *Lexical phrases and language teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- 下 薫. 2005. 『英語のゲーム 音であそぼう』. 三省堂出版.
- 下 薫. 2018a. 『チャンツとチャンクで身につく「音感」キッズクラウンデジタル』. 三省堂出版.
- 下 薫. 2018b. 『チャンツとチャンクで身につく「音感」キッズクラウンデジタル解説書』. 三省堂出版.